

告示	番号	4	慢性消化器疾患
	疾病名	早期発症型炎症性腸疾患	

早期発症型炎症性腸疾患

そうきはっしょうがたえんしょうせいちょうしかん

概念・定義

米沢らの調査では、1998年からの10年間に、国内小児消化器疾患診療施設において、17例のクローン病、12例の潰瘍性大腸炎、そして5例の分類不能型腸炎が2歳未満で発症し診療されていた。その他にも、新生児～乳児期発症の難治性の血便・下痢・体重増加不良をきたす症例が、新生児・免疫疾患診療施設などを中心に存在することが予想されるが、その実態は不明である。

症状

結腸・直腸を病変の主座とする症例では血便・下痢が主症状となることが多い。一方で小腸病変を主体とする症例では腹痛・体重増加不良・低アルブミン血症・貧血など、発症初期には他覚所見が乏しいことが少なくない。乳幼児期発症クローン病では、肛門周囲病変のみで発症し、数年の経過の後に消化管病変が出現することがしばしば経験される。

患者の多くで、経腸栄養の確立が困難で、中心静脈栄養の併用、副腎皮質ステロイドをはじめとする免疫抑制療法を必要とする。

治療

年長児発症のクローン病・潰瘍性大腸炎に準じた治療を行う。特に小児では、その効果とともに、安全性でも利点がある栄養療法を基本とした治療を行う。原発性免疫不全症が基盤にある症例では造血細胞移植が治療の選択肢となりうる。

抜粋元：http://www.shouman.jp/details/12_6_13.html